

TOEFL 管見

藤本 和子

1. ITP (= Institutional Testing Program) あるいは、TOEFL (= Test of English as a Foreign Language) のスコアが410から573点¹⁾の日本人大学生268人(Freshman: 146人; Sophomore: 82人; Junior: 28人; Senior: 12人)に、Listening, Structure および Reading の3つの Section²⁾のうち、どの Section が最も得意で、逆にどの Section を最も苦手とするかについてアンケート調査を行なった。その結果、最も得意とする Section は Structure Section であると解答した学生は、268人中120人、つまり、全体のおよそ45%であった。一方、158人、つまり、およそ59%の学生が Listening Section が最も苦手であると答えた。ちなみに、Listening Section が最も得意であると解答した学生は48人、およそ解答者全体の18%であった。結果表は次の通りである。

	得意			苦手		
	Listening	Structure	Reading	Listening	Structure	Reading
Freshman 146人	26	66	54	82	36	28
Sophomore 82人	12	38	32	54	18	10
Junior 28人	4	14	10	20	2	6
Senior 12人	6	2	4	2	4	6
Total 268人	48	120	100	158	60	50

2002年調査

ところが、Listening Sectionが最も苦手と答えた個々の学生のSection別スコアを見てみると、必ずしも、Listening Sectionが他のSectionよりも低いとは限らないのである。確かに、上記アンケート結果は単に、スコアの高低からくる学生の意識ではないであろう。日本における英語教育はear-orientedというよりも、eye-orientedの面が多いためか、見えない音に対する一種の恐怖感も苦手と考える一因となっているのかもしれない。

オーラルコミュニケーションの組み込まれた高等学校における英語教育を受けてきた学生からの解答で、Listening Sectionを苦手とする声が多いことや、実際、TOEFL対策クラスを担当してみて、Listening Sectionにおいて、日本人学生がつかずいたり、間違えたりしやすい問題パターンが見うけられることから、TOEFLのListening Sectionをはじめ、TOEFL全体について一度まとめてみる必要があると思われたのが本稿執筆の直接の動機である。

1964年以来、ペーパー方式 (Paper-Based Test) [PBT] であったTOEFLに、新たにコンピューター方式 (Computer-Based Test) [CBT] が、1998年7月から、世界的に導入され、日本では、2000年10月から実施されている。そういった、PBTから、CBTへの大きな変化も概観しながら、日本人TOEFL受験者のListening Sectionのスコアは他のSectionと比較してどうなのか、また、TOEFLで世界における日本の位置はいかなるものかについても見てみようと思う。

2. TOEFLは英語を母語としない人のための英語能力判定試験であり、アメリカの非営利教育機関であるETS (= Educational Testing Service) によって、開発され、世界およそ180カ国で実施されている。アメリカ、カナダのおよそ2400校を含む、世界中の4,400校を超える大学において、入学許可選抜の際にTOEFLの結果の提出が求められている。政府機関など大学以外でも、TOEFLのスコアを英語能力判定のために使用するところもある。

先にも述べたように、従来、TOEFLはペーパー方式であったが、1998年からコンピューター方式が導入された。2000年から導入された日本における試験会場は東京（青山、茅場町、南麻布）、新横浜、大阪の3都市5会場である（2002年

現在)³⁾。補足的にペーパー方式テストも一部地域で行われている。国内では、石川、高知、宮崎の3会場である(2002年現在)。CBTでは受験者1人につきコンピューター1台が与えられる。コンピューターに不慣れな受験者に不利とならないよう、はじめに、受験に必要なコンピューターの操作方法のTutorialがある。CBTの大きな特徴は、まず、そのスコアスケールにある。PBTは310点から677点であるのに対し、CBTでは0点から300点である。PBTとCBTの換算表はETS発行の*TOEFL Information Bulletin*などでも見ることができる。ちなみに、一般に、大学入学のための目安とされるPBT500～550点はCBTでは173～213点、PBT600点はCBTで250点である。さらに、従来のListening, Structure, Readingの3つのSectionにWriting Sectionが加わり、4部構成となった。PBT受験の場合には、TWE (= Test of Written English) が課せられる。ただし、TWEのスコアはPBTの総合点には加算されず、別に表示される。このWriting Sectionが加わったことに対して、ETSは、“This addition is one step toward a more communicative test.” (*TOEFL Test and Score Data Summary* 2001-2002 ed., p. 3) と述べているように、TOEFLはより能動型、発信型の試験になったと言えるであろう。さらに、CBTの特徴を見ていくと、ListeningとStructureの2つのSectionは“Computer-Adaptive”方式である。つまり、受験者はまず、中くらいの難易度の問題を解き、それに正解すれば、次は難易度のより高い問題、あるいは同じ難易度の問題が出され、不正解であれば、より難易度の低い問題か、あるいは同程度の問題が出されるという具合に、受験者のレベルをコンピューターが判断して問題が出される。これにより、受験者の能力がより正確に判定されるようになった。それぞれのSectionのスコアスケール、問題数、時間配分は次の通りである。

スコアスケール

Listening	0～30点
Structure / Writing	0～30点
Reading	0～30点
Total	0～300点

Writing Sectionはポイント0.0～6.0で評価され、その評価の換算スコアがStructure Sectionと合算され、それぞれのSectionがおおよそ50%ずつを占める。TOEFL総合スコアの1桁の数字が、0, 3, 7で終わるのはスコアの算出方法にある。つまり、各Sectionの結果を合計し、その合計点に10を乗じて3で割るからである。例えば、各Sectionが最高点の場合、 $(30 + 30 + 30) \times 10 \div 3 = 300$ となる。

問題数・時間配分

	問題数	時間配分
Listening	30～49	40～60分
Structure	20～25	15～20分
Reading	44～55	70～90分
Writing	1トピック	30分

ListeningとStructureの2つのSectionは前の問題に戻ることはできない。また、でたらめに解答することはスコアを下げることにつながる。一方、Reading Sectionは“Computer-Adaptive”方式ではないので、正解、不正解にかかわらず、あらかじめ設定された問題を解く。250～350語程度の4つないしは5つの文章が出題され、従来のペーパー方式にも見られる多項式選択問題に加え、本文中の語(句)、文や、パラグラフをクリックしたり、ある文を本文中に挿入したりするといった新たな問題形式がある。前の問題に戻って解答を変更することが可能である。最後のWriting Sectionは与えられた1つのトピックに関して、エッセイを書く。記述方式はキーボードでうちこむ方法と、手書きの方法があり、どちらか一方を選択できる。トピックの出題例はウェブサイト上で前もって入手することができる。受験所要時間は、はじめのTutorialなども入れて全体でおよそ4時間であり、スコアは制限時間内に、解答することができた問題数、正解数、出題された問題の難易度によって算出される。その他、CBTの特徴は、申し込みにより試験日を自由に選ぶことができる(ただし、受験は1ヶ月に1度のみである)ことや、従来のペーパー方式ではスコア返送までに、およそ5週間かかっていたが、Writing Sectionでエッセイをキーボード入力した場合にはおよそ2週間で返送される(た

だし、手書きの場合にはおよそ5週間必要である) ことである。かつ、CBTでは試験終了後、すぐにエッセイが最高点だった場合と最低点だった場合のおおよそのスコア結果がコンピューター画面上に表示される。

3. さて、日本人の Listening Section は他の Section と比較してどうなのだろうか。日本の TOEFL 平均スコアは世界でどのあたりに位置するのだろうか。

2000年7月から2001年6月までの日本人受験者は CBT 60,746 人、PBT 35,121 人であり、受験者のスコアは

CBT	L	S / W	R	Total
	17	19	19	183

PBT	L	S	R	Total
	49	52	50	505

TOEFL Test and Score Data Summary [TTSDS] 2001-2002 ed.

確かにこの期間だけのスコアを見ると Listening Section のスコアが他の Section よりも低い。では、1999年7月から2000年6月までの CBT スコア⁴⁾ および、1997年7月から1998年6月までの PBT スコアはどうかというと、

CBT	L	S / W	R	Total
	19	19	19	188

TTSDS 2000-2001ed.

PBT	L	S	R	Total
	50	50	50	498

TTSDS 1998-1999 ed.

となっていることから、日本人受験者の Listening Section のスコアが他の Section に劣ると言い切ることはできないかもしれない。が、しかしはっきりと見てとれるのは、日本人受験者の平均スコアは Listening Section のみが低いのではなく全体

として低いということである。

確かに、世界的に見て日本のスコアは低い。アジアの中でも、例えば2000年7月から2001年6月までの受験者の順位は最下位から数えたほうが早いのである。参考までに上記1年間の中国、韓国のスコア平均は次の通りである。

中国	CBT ⁵⁾	L	S / W	R	Total
		19	22	22	211

PBT	L	S	R	Total
	53	58	57	560

韓国	CBT	L	S / W	R	Total
		19	20	21	202

PBT	L	S	R	Total
	50	54	54	530

TTSDS 2001-2002 ed.

少なくともおよそ10年前から中国、韓国をはじめ、台湾、香港、フィリピン、インドなどのアジア諸国は総合スコア平均が500点を超えている。日本は1998年7月から1999年6月の期間ではじめて500点（CBT173点）を超えた。ただし、香港、フィリピン、インドはアジアの中でもかつて英語圏の国の植民地であったこともあり、日本と安易に比較するのは適切でないかもしれない。

世界のスコアを見てみると、2000年7月から2001年6月までの期間において、CBTで世界第1位はオランダ258点（それぞれのSectionのスコアは26, 26, 26；受験者数1,349人）、2位ルクセンブルグ255点（25, 26, 26；61人）、3位デンマーク254点（26, 25, 25；899人）である。その他、CBTスコア250点（PBTスコア600点）以上の国は、南アフリカ、モーリシャス、シンガポール、ベルギー、オーストリア、スロベニア、ドイツである。Native Language別のスコア平均を見てみ

ると、250点以上の言語は、1位トゥル語(265点;受験者83人)、2位カシミール語(261点;85人)、3位オランダ語(260点;1,754人)とコンカニ語(260点;363人)であり、上位10言語を見ると、ドラビダ語族、印欧語族の言語が目立つ。参考までにであるが、英語を母語とする受験者の平均は240点(8,658人)であった。

TOEFLの平均スコアだけを見て日本人の英語能力は低いと判断するのは間違いであろう。なぜならば、受験者の受験動機、および、学部入学を目指すのか、大学院入学を目指すのかなど詳細にわたって調査しなければ、正確なことは言えないからである。

もう1つ、ここで注目すべきは日本人受験者数が非常に多いことである。2000年7月から2001年6月までの世界総受験者数は、CBT 472,144人⁶⁾(日本:60,746人)、PBT 230,877人⁷⁾(日本:35,121人)であった(TTSDS 2001-2002 ed.)。なんと日本人はそれぞれ世界の受験者数の13%、15%、CBTとPBT合わせると14%を占めているのである。CBT受験者数は世界で第1位であった。CBTとPBTを合わせた受験者数は、1位中国(110,364人)、2位日本(95,867人)、3位韓国(83,125人)であった。1位は中国といっても、人口比率から考えると、やはり日本の受験者数は圧倒的に多い。ということは、様々な英語力をもつ者が受験していることになるだろうから、平均点が低いのはやむをえないとも言えないだろうか。

4.1 Listening Sectionに話を戻すことにしよう。Listening Sectionは北米で話される英語の理解力が測られる。CBTのListening Sectionは、Part AとPart Bの2つの部分から成る。Part Aは2人の話し手によるShort Conversationを聞く。設問は1つずつで4つの選択肢の中から正解を1つ選ぶ。Part Bは、Casual Conversation, Academic Discussion, および、Academic Lectureを聞く。最初のものは2人の話者による会話を聞いた後で、やはり4つの選択肢をもつ設問が2、3題出題され正解を1つ選ぶ。Academic DiscussionとAcademic Lectureではそれぞれ、あるトピックに関しての話し合いや講義を聞くが、トピックに関する特別な知識は正解するために必要とされない。4択問題の(正解1つ)の他に、正しい図や、

図の中の適切な部分を選んだり、4択問題から2つの正解を選んだり、聞いた内容に関するものを3つのカテゴリーに分類したり、4つの情報の順番並べ替えなどの問題が出される。CBTではこれらの英文を聞いている間、スクリーン上で静止画像を見ることができるほか、質問文を聞きながら、その質問文をスクリーン上で見ることができる。

4.2 日本人大学生からPart BよりもPart Aのほうが難しいということをよく耳にする。おそらくその理由としては、Part BではDiscussionやLectureの詳細なというよりもむしろ全体的な理解力が試されるのに対して、Part Aは会話自体も短く、うっかりしているとつい聞き逃してしまったり、問題の選択肢にも特徴があることなどが挙げられるだろう。例えば、Conversation中のカギとなる単語と同じ、あるいは似た音をもつ語を含む選択肢は正解でないことが多かったり、正解の選択肢にはカギとなる語そのものではなく、その同意語が用いられていることが多い。少々、紛らわしいものもある。Part Aにはその他、出題パターンや傾向といったものがあるが、単にスコアを上げることを目標とするのであれば、これらのパターンをつかみ、受験のストラテジーをおさえることが目標達成への近道といえるかもしれない。しかし、果たしてそのようにして高得点を取ったとしてもListening力全般の向上といえるのかという疑問が残るところである。

4.3 CBT Listening SectionのPart Aでは出題される頻度の高いいくつかの文法構造がある。受動態、否定表現、仮定法などである。中でも特に、否定表現と仮定法には、実際、つまりく学生を多く見かけ、また、これらの文法構造が用いられた問題に関する学生からの質問も多い。否定表現では、二重否定(e.g. Nobody is unhappy.)や、barely, scarcelyなどの準否定語が用いられた表現(e.g. I had barely enough time.), また、noやnotといった否定語と比較級が共に用いられ最上級の意味になるもの(e.g. That couldn't be worse.), 仮定法では、仮定法過去完了、それもifが省略され倒置が起きた表現にとまどう傾向があるようである。Conversationの中で、話者によって二重否定表現が用いられ、正解の選択肢には

肯定表現が用いられていたり、否定語と比較級が共に用いられた表現に対して、最上級の表現が用いられている選択肢が正解であったり、さらに、仮定法の表現を聞いて、正解の選択肢には直説法の文が用いられていたりする。受験者はこれらの表現にすばやく対処することが要求される。

TOEFL用教材(*Longman Complete Course for the TOEFL Test*, 2001, pp.165-70)を用いてテストしてみたところ、そのテスト結果からも、学生がこれらの問題につまずく傾向にあることがうかがえた。このテストはペーパー方式で、内容は Short Conversation, Longer Conversation, Talk で、設問 50 問から成り立っている。うち、Part A にあたる Short Conversation は 30 問である。受験者は ITP あるいは TOEFL スコアレインジ 410～573 点の日本人大学生 83 人である。50 問の平均正解率はおおよそ 72% であった。Part A 30 問のうち、二重否定と仮定法過去完了を含む次の 2 問の正解率が特に低かった。

二重否定

会話文の一部

Oh, he isn't too unhappy to be retiring.

正解の選択肢

He is eager to leave his job.

仮定法過去完了 (if の省略)

会話文の一部

I wouldn't have bought these cherries had I known that grapes were so cheap.

正解の選択肢

He didn't know that grapes were cheaper than cherries.

(下線は筆者による)

これら 2 問の正解率はいずれもおおよそ 29% であり、50 問の中で一番低かった。とはいえ、2 番目の問題のような仮定法過去完了 (if の省略) がふだんの会話の中で

どの程度の頻度をもつのかという点に関しては疑問を感じるところであるが。

TOEFLにおける日本人の弱点を知るためには、より多くの受験者に、さらなるテストを繰り返し受けてもらい、より確かなデータを得る必要があることは言うまでもない。だが、少なくともここでははっきりと言えることは、Listening Sectionでも文法構造が問われ、受験者はそれらの構造知識をしっかりと身につけておく必要があるということである。

5. 以上は、Listening Sectionに苦手意識をもつ日本人大学生が多いことから、日本人大学生、そして日本人は本当にListening Sectionのスコアが他のSectionに比べて著しく低いのだろうかという疑問から始まったものである。

日本人TOEFLスコア平均はListening Sectionのみが低いというよりも、いずれのSectionも低めなのである。

本稿では、具体的に取り上げなかったStructure, Reading, WritingのSectionであるが、それらについて簡潔に述べておくことにする。Structure Sectionでは、標準書きことばで使われる文法や文法構造を見極める能力が測られ、Reading Sectionではアカデミックなトピックに関する文章の読解力、内容把握力が測られ、語彙（ある語の同意語、反意語）に関する問題も出題される。Writing Sectionでは、自分の考えと、その考えをサポートする理由・根拠を具体的に述べる文章を組み立て発展させる力が測られる。このSectionで、Structure Sectionで必要とされる知識も同時に試されると言えよう。

ListeningとReadingのSectionに対応するためには、言語学、生物学、地質学、天文学、文学、歴史学といった学問分野の語彙もある程度、身につけておきたい。それぞれの単語の音を正しく認識しておくことも必要であろう。正しい発音ができなければ聞いてもわからないはずである。

このように、聞く力はもちろんであるが、しっかりとした文法知識を身につけ、ある程度の長さの文の内容をすばやく読み取る力、自分の考えを適切な表現で論理立てて書く力をつけなければ、TOEFLのスコアで高得点は期待できないのである。

最後に、日本人のTOEFLスコア平均はここ10年で伸びてきている。一日中英

語を使用しなくても生活に直接支障をきたすことはほとんどない日本にあって、日本語とはまったくもって別の語族に属する英語に一生懸命取り組もうとする姿、そして、英語学習、英語教育に対するわが国の情熱はまことにすばらしいものである。どこかで聞いたようなせりふであるが「頑張れ、ニッポン!!」とエールを送りたいものである。

注

- 1) コンピューター方式TOEFLのスコアを報告した学生5人もここではペーパー方式TOEFLのスコアに換算してある。
- 2) ITPはこれら3つのSectionのペーパー方式試験である。したがって、今回のアンケートにはWriting Sectionは入れなかった。
- 3) コストの関係もあってETSは世界のいくつかのコンピューター方式試験会場を徐々に閉鎖している。国内では2002年5月に沖縄、札幌、仙台、名古屋、広島、福岡の6会場が閉鎖された。
- 4) 日本でCBTがはじめて導入されたのは2000年であるので、このスコア平均は日本以外の試験会場で受験した日本人のものである。
- 5) 中国ではまだCBTはまだ導入されていない(2002年現在)。したがって、中国以外でCBTを受験した中国人の平均スコアである。
- 6) Country of birthを報告しなかったり、また英語が母語であると答えた41,330人の受験者を含む。
- 7) Country of birthを報告しなかったり、また英語が母語であると答えた1,859人の受験者を含む。

参考文献

Deborah Phillips *Longman Complete Course for the TOEFL Test*, Pearson Education Company, 2001.

Preparing Students for the Computer-Based Test, Educational Testing Service, 1999.

TOEFL Information Bulletin, Educational Testing Service, 2002.

TOEFL Test and Score Data Summary[TTSDS] 1998-1999 ed., Educational Testing Service, 1999.

TOEFL Test and Score Data Summary[TTSDS] 1999-2000 ed., Educational Testing Service, 1999.

TOEFL Test and Score Data Summary[TTSDS] 2000-2001 ed., Educational Testing Service, 2001.

TOEFL Test and Score Data Summary[TTSDS] 2001-2002 ed., Educational Testing Service, 2001.